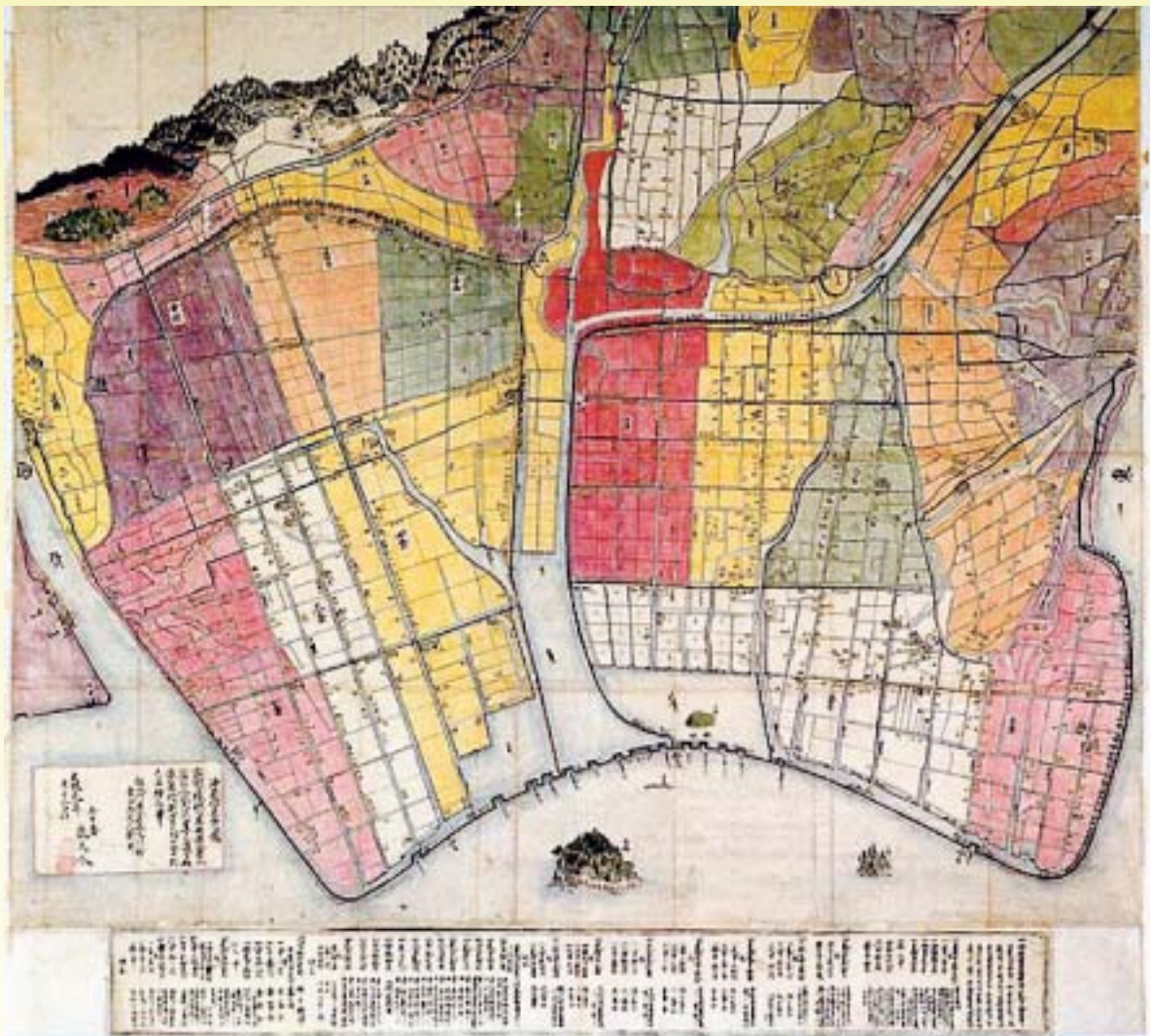


おきしんでん かんたく

沖新田の干拓

おきしんでん おかやまし みさおやま なんぶ いったい ひろ
沖新田は、岡山市にある操山南部一帯に広がる
た ひゃっけんがわ くっさく かいはつ
る田んぼで、百間川の掘削により開発された
えどじだい かんたくち
江戸時代の干拓地です。



沖新田東西之図 : 文政元年(1818)オランダの測量技術により制作された (資料: 岡山市立中央図書館蔵)

おきしんでん かんたく ひやっけんがわ 沖新田の干拓と百間川

岡山県の干拓の歴史は古く、8世紀(奈良時代)から行われていたという記録もあり、岡山平野にある約2万5千haの田んぼや畑のうち、約2万haが干拓により生み出されたものといわれています。

特に、江戸時代に行われた沖新田の干拓は、当時としてはきぼが大きく、百間川と倉安川の掘削といっしょに行われたという特徴があります。

いったいどのようにして、沖新田の干拓ができたのか、少し歴史をさかのぼってみましょう。

(注) 飢饉 (ききん)

作物が日照りなどで育たなくなり、食べ物が足りなくなること



○津田永忠の陶像（岡山市沖元 沖田神社）

寛永17年(1640)、備前岡山藩の津田永貞の三男として生まれた。岡山藩の池田光政に仕え、閑谷学校や後楽園、曹源寺を造営している。68歳でこの世を去るが、永忠の業績は今も人々に語りつがれている。

昔は、大雨がふると旭川が増水し、たびたび家や田んぼが水につかるこうずいひがいが発生していました。また、お米の採れる量も現在に比べ非常に少なく、日照りが続いたり洪水による作物ひがいで飢饉もたびたび起こっていました。

そこで、1654年(江戸時代)に熊山蕃山という人が旭川の洪水を防ぐため、旭川と海を接続する新たな川をほることを考案しました。

1669年に蕃山の弟子である津田永忠により川の掘削が行われ、現在の百間川ができ、洪水ひがいから町や村を守ることができるようになりました。

また永忠は、飢饉を解消するためには、新しく田んぼを造ること（新田開発）が必要と考え、百間川によってはいすいができるようになった操山南部一帯に広がっていた干潟の干拓を考案します。

しかし、干拓により出来た新田は塩分を多くふくんでおり、お米を作るためには、たくさんの用水が必要になります。

そこで永忠は、水によゆうのあった吉井川に着目し旭川と吉井川をつなぐ倉安川を造り、吉井川の余っている水を新田の用水とすることにしました。

このようにして、用水が確保できたことで「倉田新田」「沖新田」など現在の岡山市操山南部一帯のだいきぼな1869haの新田開発が実現し、さかんに農業が行われることになりました。



現在の沖新田干拓の航空写真

参考文献：岡山県土地改良史（昭和59年9月1日 岡山県土地改良事業団体連合会）



トピックス

(注) 樋門 (ひもん)

水を流したり止めたりするための仕切のことで、「樋」ともいいます。幅や高さ、開く隙間を変えることで、流す水の量を調節することができます。

倉安川の「二の水門」



倉安川吉井水門(正面が二の水門、その奥が高瀬田)

The Lit City Museum

(<http://www.city.okayama.okayama.jp/museum/>)

(資料：岡山市教育委員会生涯学習部 文化財課)

倉安川は、吉井川中流と旭川下流をつなぐ、総延長約20kmの農業用水路で、近年まで高瀬舟が往来する物資輸送のための主要な運搬路としても使われていました。

岡山藩主池田光政の命により、津田永忠が延宝7年(1679年)に掘削したもので1年間という短期間で完成したものです。

吉井川からの取水口には、2つの水門が造られ、完成以来約300年

の間壊れることもなく、今も当時の姿をそのまま残しています。

百間川の河口水門「唐樋」

津田永忠は、百間川の河口部に「唐樋」と呼ばれる石造りの樋門を造りました。

(注)

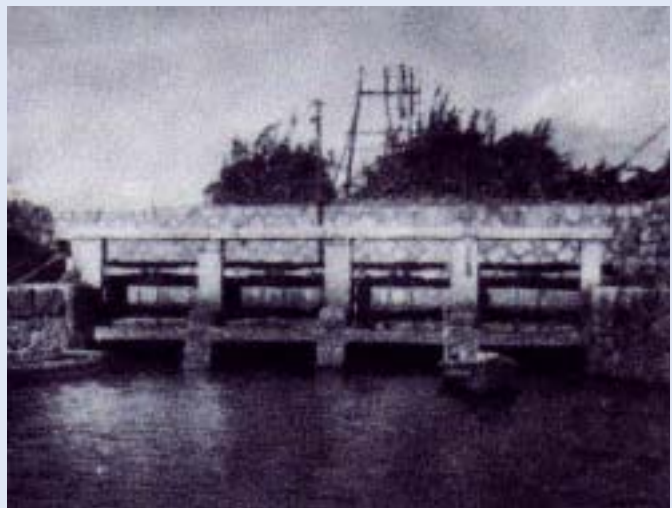
この樋門は、上部が高潮被害を防ぐ役割をもち、下部は排水樋門の役割をもっていました。そして、昭和42年の新河口水門ができるまでの263年間、新田を高潮被害から守り続けました。

他にも永忠が造ったとされる祇園大樋があります。いずれも構造は非常に精巧な石造りであり、当時の技術力の高さを物語っています。

(注)

(注) 高潮 (たかしお)

海が満潮の時に強い風が吹きつけることなどにより、海面が異常に高まり、海水が陸上に侵入しやすくなること。



唐樋 (資料：国土交通省岡山河川事務所)